

## MRI ECONOMIC REVIEW

株式会社三菱総合研究所  
政策・経済研究センター

## 米大統領選の行方(5) 民主、現実主義と理想主義

今回の米大統領選で、民主党の指名争いは、クリントン氏とサンダース氏の2人に絞られた。クリントン氏は元ファーストレディーで、オバマ政権では国務長官を務めるなど政治家としての経験・実績は申し分ない。米国初の女性大統領への期待もある。一方でサンダース氏は、バーリントン市長を務めた後、無所属の議員を経て、民主党から大統領選に立候補した非主流派だ。

クリントン氏の主張は総じて現実主義的だ。一方、社会主義者を自称するサンダース氏は、大企業や富裕層の富の独占解消を訴えるなど、理想主義的とされる。

公的医療保険では、クリントン氏は手厚い「オバマケア」の拡充を主張する。サンダース氏は国が一括して保険を提供する皆保険制度を主張。税制では、クリントン氏は富裕層の所得控除制限など緩やかな改革を提示。サンダース氏は富裕層の所得税率を大幅に引き上げるべきだとする。

外交政策も2人の主張は違う。サンダース氏が軍事力の行使に慎重なのに対し、クリントン氏はイスラエルによるガザ空爆支持を表明し、中国へも強硬姿勢を崩さない。

クリントン氏は、黒人やヒスパニック層の高い支持をもとに優勢を維持している。しかし、若い世代を中心に、理想主義的な政策を掲げるサンダース氏など他の候補者へ一定の支持が広がっていることは、格差拡大や教育費高騰など米国社会のゆがみの表れともいえる。ブッシュ家に続きクリントン家と、大統領職が特定の家族で占められることへの警戒心もある。政治を変えたいという米国民の思いは根強い。



※本コラムは、日本経済新聞の「ゼミナール」に2016年3月4日から17日まで10回にわたり掲載されたものです。

内容の全部または一部を無断で複写・転載することは禁止されています。